

## ■ 第5章 調査の記録 ■

### 1 はじめに

第四章までの内容を受けて、97年12月に、都内の中学生を対象に小規模な質問紙法調査とグループインタビューを実施した。以下にその概要を述べる。

#### ● 調査の概要

##### ● 質問紙法調査

- ・ 実施期間 97年12月上旬～中旬
- ・ 実施地点 東京都多摩市（一部区部でも実施）
- ・ 標本抽出方法 ベネッセコーポレーションのネットワークで適宜配布
- ・ 回収方法 郵送
- ・ 有効回答数 85件
- グループインタビュー
- ・ 日時 97年12月13日（土）  
1時～3時半
- ・ 場所 ベネッセコーポレーション会議室
- ・ 標本抽出方法 アンケート回答者のうち協力意向者から無作為抽出
- ・ 対象者
  - F男（中学一年男）
  - Y男（中学一年男）
  - A子（中学一年女）
  - O子（中学一年女）

### 2 学校の状況

#### (1) 好かれる人・嫌われる人について

「クラスで人気があるのはどういう人か」という質問に対し、次のような答えが返ってきた。

「頼れる人（部活などで分からない時に教えてくれる）」

「明るくて皆を楽しませてくれる人」

「クラスの中心になり、明るくて、相談にのってくれる人」

アンケートの回答も合わせてみると「人気のある人」の最も中核的な資質は、「明るい」

「性格がよい」「頼れる」の三つに集約されるといえる。（「性格がよい」には「やさしい」「人の気持ちがかかる」「信用できる」

などを含む。）他者より何らかの点で優れていること：「勉強やスポーツができる」「情

いずれも多摩市に居住する市立中学生（プライバシー保護のため、右の様に記録する）

S子（中学一年女）  
H美（中学一年女）  
I子（中学一年女）  
M子（中学二年女）  
M美（中学二年女）  
M男（中学二年男）



報に通じていて話題が豊富」「自分の考えを持っている」などは、これらに比較すると少ない。

「頼れる」とはある程度リーダー的な役割を果たす存在ということであろうが、他方で「仕切りたがりな嫌だ」という回答も見られた。このことについて、グループインタビューで「仕切り屋は嫌ではないか」と尋ねたところ、「仕切っている、引く時には引く人」がいいという。押しつけがましくないリーダータイプが望ましいということであろう。逆に「クラスで嫌われる人」を尋ねた設問では、「暗い」「性格が悪い」が最も多く、ちょうど「人気がある人」の裏返しになっている。「性格が悪い」には「自分勝手」「わがまま」などを含む。その他に「性格が悪い」の中には、「嘘をつく」「人の悪口・陰口を言う」なども入れてもよいだろう。

また「自慢をする」ことが目立って嫌がられているのも興味深い。大人の場合、この「自慢」に対しては、もう少し許容的なのではないかとと思われる。勉強・スポーツなど、限定された領域で横並びに競わされている中学生は、大人以上に、他者の自己主張に敏感なのではないだろうか。

グループインタビューでは、ある特定の「変わった子」(具体的ににははっきりしないが、個性が強く、協調性に欠ける子と思われる)

がクラスの皆に嫌われている(「I子」という例も聞かれた。やはり横並び意識の強い年齢において、周囲が見えない/同調できない者は排除されがちなのである)。

ところで、「暗い子」は完全に嫌われているが、「おとなしい子」という表現は「人気者」と「嫌われる」の両方に登場する。また「自慢すること」が嫌がられる一方で、「自分の意見を持つていない/言わない」ことも少数ながらネガティブなこととしてあげられている。総合的に見るならば、自分なりの考えや何らかの優れた資質などを内に持っていることは評価されるが、それを積極的に主張することは嫌われる、といえるのではないだろうか。中学生の生活には大人と同様かそれ以上の高度なコミュニケーション技術が必要不可欠になっている状況がうかがえる。

「不潔」という回答はアンケートでは少なかったが、グループインタビューで尋ねたところ、男子を含め、全員が一致して「嫌い」と答えていた。おそらく現在「不潔」と見なされるような子どもは実際にはかなり少なくなっており、「清潔」はあえてあげるまでもない前提になっているのだろう。「小学校の時は、私服なので不潔さが分かるから、いじめがあった。中学では制服だから不潔さがよく分からない」(「M子」という声も聞かれた。ただ、一例「ある男子が不潔なため全女子に

嫌われている」(「M男」という報告もあった。

「嫌われる人」についての設問で男女差が最も大きかったのは、相当数の女子が「同性と異性の前で態度が違う」ことをあげていたのに対し、男子では皆無だったことである。グループインタビューでも、女子は「男子の前では態度が違う子」に非常に敏感であった。「あまり好きじゃない。べとべとした感じだから」

「そういう女の子は、男子の前だと声が違うし上目使いになる」

「女子の前だとうるさいのに、男子の前だと静かになるなど、二重人格っぽい」

おそらくこの男女差は、女性では「異性に好かれる態度」(行為でなく)がある程度一般的に確立し、しかもそれが、女の子一般のいわゆる「自然体」と異なってくるのに対し、男性ではそうでないことが大きいと思われる。

## (2) 友達関係で気をつかうこと

アンケートの「同級生とのつきあい方で気をつかうのはどういうことですか」という設問に対し、「特に気をつかわない」といった否定的な答えは2割弱(85人中15人)で、8割以上(同68人、無回答2)という多数が何らかの形で「気をつかっている」と回答していた。ここでも男女差が見られ、女子は82%以上(62人中51人)が肯定的な回

答をしたのに対し、男子は75%弱であった。女の子の方が友達関係に敏感な視線を注いでいるといえる。グループインタビューではA子の連れてきたグループが「別に友達には気をつかわない」と言っていたが、これは友人同士で遠慮し合う感情が働いたものと推測され、実態は必ずしも回答通りではないだろうと思われる。

「気をつかう」ことの内実としては、男女の別なく「人を傷つけないようにする」「人が気にしていたり嫌がることは言わない」が圧倒的に多い。この二つはかなりの程度まで重なっている。中学生は、友達関係において、まず「傷つける言葉」を言わないことに細心の注意を払っている。アンケートでは「人を傷つける言葉」の内実について詳しく述べた回答は少ないが、グループインタビューでは次のような答えが聞かれた。

「他の人が言っていることを言われたり、泣いたり、外見にすることなど」(「O子」)

「くせ毛のことなど、やはり外見的なこと」(「F男」)

このように、中学生は「傷つく言葉」を第一には外見的な特徴と結びつけて理解しているようである。

男子ではほぼ全てが「相手を傷つけることを言わない」という答えで尽きていたのに対し



し、女子では少数ながらより高度な気のつかい方がうかがえた。例えば「話を合わせる」「場を明るくする」「お互いの気持ちを探りながら話す」など、関係や会話の全体が円滑に進むための配慮。また「おみやげや誕生日のプレゼント」など、儀礼的なモノの交換。さらには「相手が自分と一緒にいて心が安らげるようにする」といった回答まで見られた。

### (3) 教師との関係

中学生と学校の教師との関係は、気をつかうか否かという以前に、比較的薄いものものうである。「何か困ったことが起きたら、担任の先生に相談するか」という質問をしたところ、ほとんどが否定的な答えであった。「困った時も、あまり相談しようとは思わない」「(M美・M男・F男・Y男)」「先生は好きじゃないから、相談しないし、話そうとも思わない」「(I子)」

中学生にとって、少なくとも担任教師は「心を打ち明けられ、頼りにできる大人」という存在ではないようだ。「困った時には友達に相談する」という答えにうかがえるように、この年齢は、大人との関係より、同年代との横のつながりを重視するようになる時ではある。だが、親以外に相談できる第三者的な大

人がいない、あるいは、そういう大人が全くいないという状況は、いじめなどの問題に巻き込まれた時、解決を困難にする。親、教師、といった身近な大人への信頼感が低下している以上、専門家によるカウンセリングなどへのアクセスが向上させることが必要となるだろう。もちろん、O子のように、「友達どうして何か揉め事があると、先生がすぐ気づいて、直してくれ。秘密も守ってくれ。」「何か言おうと、先生もジョークで返してくる。」「何でも言える」というような良い関係を担任教師と築いている例もある。だが逆に、A子のグループのように、教師の不品行を知って完全に信頼を失っているという例も見られる。教師と生徒との関係はケースパイケースである、というあたりまえのことを確認する必要がある。

### (4) ストレス源としての学校

以上のように、中学生は友人関係などになり気をつかっているといえる。このことから「友達にも先生にも気をつかうし、学校は面倒だ」という感じがするかと質問したところ、総じて強く肯定する答えは返ってこなかった。だがやはり「友達関係がごちゃごちゃになると、行きたくない気になる」「(O子)」というように、友達関係に最も多くのエネルギーを割いていることがうかがわれた。

## 3 学校外の生活

### (1) 学校外の友達関係

「同じ学校に通っていない友達がいいますか」という設問に対し、アンケートでは約85%という圧倒的多数が「いる」と回答していた。グループインタビューの対象者も全員がイエスであった。

学校外の友達と知り合ったきっかけについては、「小学校が同じだった」という回答が最も多く、「引越す前に同じ学校だった」とも合わせ、中学生にとって、やはり学校という場が第一の出会いの場となっていることが分かる。これに比べて「近所に住んでいる」という地縁的なつながりは薄い。これは「小学校が同じ」という回答にほぼ包括されると考えてよいだろう。他に「塾」「習い事」といった学校外の学習機関も多かった。

これに対し、「友達の紹介」「(5人)」「文化祭やイベント」「(1人)」のように、学校ないし学校の場を全く介在させないつながりは、非常に希薄であるといえる。こうしたネットワーク的な関係の広がりは、都心の高校生ならばおそらくもっと濃く見られるであろう。今回対象となった生徒たちは、学校を中心とする昔ながらの中学生用の「場」からあまり飛び出すことがないようである。グループインタビューの対象者たちも、学校外の友

達と「あまり会わない」と答えた人が多く、その生活の多くが学校という範囲内に収まっているようだ。

学校以外の友達関係での気のつかい方や、好かれていない／嫌われている人については、学校内の友達の場合とほとんど異なる回答はあまり見られず、「自分の学校のことは話さない」「ように気をつける程度であった。グループインタビューでも同様である。「その人たちと何をすることが多いですか」という設問に対しては、「話をする」「遊ぶ」という答えが多かった。この「遊び」の内容について、男子は具体的な回答が少なかったが、女子では「買い物」「プリクラ」がかなり見られた。プリクラが、比較的疎遠な友達関係をつなぐコミュニケーションツールとしての機能を果たしていることがうかがわれる。

### (2) 居場所の問題

今の若者は、学校にも家庭にも地域にも「居場所がない」と感じている：こうした知見が最近いくつか発表されている。今回のグループインタビューでは、こうした感覚ないし表現が中学生に分け持たれているかを検証するために、「最近、中学生や高校生が「居場所がない」とよく言うが、そう感じたことはあるか」という直接的な質問を試みた。結果としては、全員が否定的な反応であった。「居



場所がない」とはどういう意味か」という質問も二三人からなされ、質問の意味自体があまりつかめないようであったし、途中で「『居場所がない』とは、例えば、大勢でいるのになぜか自分だけ寂しいと感じるとか」などとヒントを与えたが、それでも分かりにくかったようである。最終的に全員が「ない」と答えた。

この結果から、「居場所がない」という感覚および表現は、少なくとも中学生一般に分け持たれているものではないといえる。今回の対象者たちは皆、自分の所属する学校内である程度満足のいく友達関係を結ぶことができていたようで、例えば「いじめ」の標的となっていたような中学生にこの質問を向けたとしたら、違った反応が返ってくるかもしれない。あるいは対象が高校生であったら、もう少し理解が深いと思われる。

関連する質問として「一番落ち着ける場所はどこか」を尋ねたところ、答えは大別して次の三つであった。

「一人でいる時（自分の部屋など）」

（F男・Y男・M男・A子・H美・S子）

「親しい友達と二人でいる時（友達の部屋など）」（M美・O子・M子）

「家族と一緒にいる時」（O子・I子）

「一人でいる時」が多く、特に男子は全員がこの回答であるのが注目される。「自分の

部屋で、寝袋に入っている時」（F男）という答えもあり、胎内帰帰欲求を思わせるような、外界の遮断によって落ち着きを得る場合もあるようだ。

A子・H美の中一女子二人は、やはり「自分の部屋に一人でいる時」であったが、「そういう時に何をしているか」を重ねて尋ねたところ「手紙を書いている」という答えであった。手紙を書くという行為は、文字を媒介とすることで自分の内面が伝えやすくなるという点で、実際に対面するよりも、ある意味ではさらに親密な感情を与えてくれる。これは「一人でいる時」と「親しい友達と一緒にいる時」の感覚を合わせ持つような回答といえよう。

「親しい友達と一緒にいる時」という人は、「大勢では落ち着かない」と「一人ではつまらない」と感じていた。

「家で家族とテレビを見てる時と、気の合う友達一人を呼んで話している時。一人はつまらない」（O子）

「学校で気が合う親友と二人で話している時。大勢で話す時は、話題が違い、いろいろな人に合わせなければならぬから。一人だと、つまらないし、何かしなきゃと思ってしまう」（M子）

「家族と一緒にいる時」だけをあげた人は一人であったが、これに関連して「家族に気

#### 4 親子関係・家庭生活

対象者たちは「家族には気をつかわない」と、完全に開け広げというわけではない。「親に言えない秘密はあるか」と尋ねたところ、多くが「ある」と答えた。例外的に「友達には秘密をつくるけど、家では秘密はない」（M子）という人もいたが、彼女は「困ったことはたいてい友達で解決がつくので、親にも相談しない」とも言っている。意識的に「言っていない秘密」という秘密を持つことはないが、全てを親に言っているわけでもないということがある。

秘密の内容としては「好きな子のこと」（M男）や「先生に怒られたこと」（M美）があげられたが、この二つはかなり一般性があるのではないだろうか。前者については、性思春期以降の子どもは、恋愛などの自分の性に関わってくる事柄を親と共有することは稀である。

後者については例えば子どもは学校生活における自分へのネガティブな評価を親に隠そうとする傾向がある。たとえ「いじめ」の対象にされた場合でも親にすぐ相談することは少ないと思われる。その心理的な理由としては、(a)親が学校の価値観に同化してさらにネガティブな評価を上乗せするだろうという予測（先生に怒られたことを話せば、親も怒るだ

をつかうか」と尋ねたところ、程度の差はあるものの、全員が「家族には気をつかわない」と否定的な答えであった。後述するように、多くの回答者が親に対して秘密にしていることとあり、無防備に全てをさらけ出しているというわけではない。だが、友達関係と比べると、やはり互いの欠点などを含めて「よく知っている」とことから、「それと気づかずには傷つくことを言ってしまうのではないか」といった緊張感が少なく、それが「家族には気をつかわない」という回答になっているのではないだろうか。

落ち着ける場所という聞き方に対して、「大勢で何かをしている時」という回答が全くなかったことには注目する必要があるだろう。

例えばクラブ活動やクラスの行事や、あるいは三人以上のグループでの行動は、楽しい場合もあるだろうが、こと「落ち着き」とは無縁なものと認識されている。彼らが少子化世代であることや、地域社会の解体後の世代であることが関係しているかどうかは慎重に検討しなければならぬが、団塊世代が中学生の時代に同じ質問をしたら、仲間と一緒に何かをしている時という回答が混じったはずだ。



ろう) (b)学校のことで親に相談しても有効な解決策を示してもらえないだろうという諦め (c)親に下手に介入されると事態を悪化させるだろうという見通し (d)親に心配をかけたくないという配慮 (e)親に自分のネガティブな姿を知られたくないという見栄的な感情 などが考えられよう。

性や恋愛・学校でのネガティブな評価の他にも、子どもが親に秘密にすることは様々であらう。例外的だろうが、(おそろく遊び感覚で)「ある幼稚園に塀を乗り越えて不法侵入したら、通報されて警察が来た」(A子)ことが秘密、という回答もあった。

親の子どもに対する期待をどう読みとっているかについて、「勉強について注意される」人が多かった。(F男・M子・H美・M美・I子・A子)、「親が成績が悪いと怒るのはなぜだと思ふか」および「親はどういう人になつてほしいと思つてゐるか」を尋ねた。

「成績が悪いと怒られる。父は『自分より偉い人になれ』と言う」(F男)

こうした「親より偉くなれ」という昔風の期待は例外的で、多かったのは「将来は自分のなりたいたいものになれ、その夢を叶えるため今は勉強しなければならぬ」という言い方である。

「成績が悪いと怒られる。高校に行けなくなるから。将来何になりたいかと親に聞かれたので、小さい子どもが好きだから保母さんか先生になりたいと言ったら、いいね、それは勉強しなければと言われた」(M美)

「将来の夢を実現するために今は勉強しろと言われた」(I子)

「勉強しないと将来がだめになると言われる」(M美)

「親は成績が悪くても怒らないが、保母さんや先生になりたいので、自分のなりたいたいものになれ、そのためには勉強しろと言われる」(O子)

「将来は自分の好きなことをしろと言われる」(M男)

こうした回答から見ると、対象者たちの両親は、「いい高校・大学を出ていい会社に入れ」といった一元的な偏差価値主義的な価値観を押しつけることなく、子どもの自主性を尊重しているようだ。これは逆にいえば、その将来像について明確なイメージを与えられないことがないということでもある。

子どもが大人に対する視線について。まず、子どもが大人に感じる不可解さを「親／学校の先生の『ここが分からない』ということがあるか」という設問で尋ねたところ、「大人が自分の若い時代の価値観を子どもに押しつ

けようとする」という、昔ながらの世代間ギャップが現在もなおいくらかはあることが分かった。

「父が、今と昔は違うのに、昔のことを常識だと主張する。服が派手だとか」(O子)「先生が昔の流行をまだやっていること」(M男)

「親が物を捨てられず、何でもかんでもためこむこと。家庭科の先生が、これくらいでできないと日本女性と言えませんか、編物ができないと生きる力が少ないなどと、変なことばかり言う」(F男)

また「母がなぜ父と結婚したかが分からない。父はかつて悪いので、自分だったら結婚しない」(M美)というように、思春期以降になると、両親の男性／女性としての側面を発見し、それを不可解に感じることもあるようである。

次に「親について嫌だなと思うことは何か」を尋ねたところ、次のような傾向が見られた。

親の男性／女性としての面への違和感。

「母が派手な服や化粧をすること」(M男)

「母が派手な服ばかり着ること」(H美)

家庭外の社会生活での不適切と思われる振る舞い。特に、子どもの友達関係に過度に介入すること。

「父が友達が来ると顔を出すこと」(A子)

「友達と電話してると、父がわざと大声を

出すこと」(H美)

「一緒にどこか行くと、父が大声で呼ぶ。母は特にない」(O子)

言葉と行動の不一致や、行動間の矛盾など、広い意味で虚偽的と思われること。

「母が、自分の机の上も汚いの、僕の机についてばかり怒り、勝手に片づけてしまう」(F男)

「父が酔っ払って帰って来ると、ちよつとしたことで怒る。母は特にない」(I子)

「自分の子どもの頃と今を比べたがる。自分もつと勉強したとか、成績がよかったとか」(Y男・M子)

## 5 ポジティブ・ネガティブな動機づけ

### (1) 「やる気」について

何らかの目標を目指して行爲する場合、その動機づけには、もちろん本人の性格や嗜好などの内面から来るものが第一義的と思われるが、親や社会などの外部もその水路づけに大きな影響力をもつことがある。こうしたポジティブ・ネガティブな動機づけのあり方を探るために「どういう時にやる気が湧くか／やる気がなくなるか」という質問をしたところ、回答のほとんどは、目標が時間的に間近



に迫っているなどの客観的状況か、あるいは内的な気分集中した。

「テストが近いなど、せっぱ詰まった時。」

「夏休みとか、宿題の締め切りなどが決ま

っている時」(F男)

「部活の試合が近い時。勝つと、自分がう

まくなつたな、練習の成果がでたと満足で

きる。やる気がなくなるのは、数学とか苦手

な科目が分からない時」(I子)

「部活の試合が近い時。やる気がなくなる

のは、数学とか苦手な科目が分からない時」

(H美)

「何かやりたい目標があると、その前に勉

強を片づけておかなければならないので、勉

強もする気になる」(M子)

「忙しい時。やる気がなくなるのは、暇な

時」(M男)

「友達関係がいいなど、調子がいい時」(O

子)

「天気がいい時」(M美)

これに対し、外部から来る動機づけを尋ね

る「人にほめられるとやる気につながるか」

という質問には、あまり肯定的な答えがな

った。「やる気がなくなるのは、やっている

時にいろいろ言われる時」(M子)「やろう

としている時にやれと言われた時」(Y男)

という場合の「やれ」と言うのは親であると

には、「いない」が約6割、具体的な名前や

職業を示した人は約3割で、目標とする人物

が見られ、男子では「いない」の割合が全体

より多く約7割(21人)。「いる」が約2

割(6人)であった。今の時代には男の子の

方が将来の目標をみいだしていくのかもしれ

ない。「いない」派の中には、「人のマネを

しないで、自分なりに目標へ向かいたい

から」「自分は自分として生きたいから」とい

思われ、親のこうした時宜を得ない注意は子

どもの「やる気」をかなり削ぐようである。

アンケートを見ると、その多くはグループ

インタビューと同様の傾向「テスト・行事・

試合などが近い時」「自分の好きなものの時」

など、で、「人にほめられた時」という回答

は1割強(10人)であった。注目されるの

は、それとほぼ同じ割合(8人)が、友達へ

の競争心(「友達にテストでいい点を取った

時」など)を動機づけとしてあげていること

である。この結果から見ると、限られた分

野で横並びに競わされている中学生にとって、

身近な友達の間での序列が大きな意味をもつ

ていることがうかがわれる。

アンケートの「誰にほめられるのが嬉しい

ですか」の「一番うれしい人」については、

「親」(どちらか単独・祖父母なども含む)

が48人、「友達」(好きな人・先輩なども

含む)が31人で、ほめられて最も嬉しいの

は親であった。逆に「誰にけなされるとイヤ

ですか」についての一位は「友達」43人・

「親」26人で、どちらかといえば友達から

のマイナスチェックをより恐れているよう

である。

(2)目標とする人物

アンケートの「あなたは『この人のように

になりたい』と思う人がいますか」という設問

に、

「いない」が約6割、具体的な名前や

職業を示した人は約3割で、目標とする人物

が見られ、男子では「いない」の割合が全体

より多く約7割(21人)。「いる」が約2

割(6人)であった。今の時代には男の子の

方が将来の目標をみいだしていくのかもしれ

ない。「いない」派の中には、「人のマネを